

<株式会社エフエム東京 第 470 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 2 年 7 月 7 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 11 階 JET STREAM 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

| | |
|----------------|--------------|
| ロバート キャンベル 委員長 | 内 館 牧 子 委員 |
| | 川 上 未 映 子 委員 |
| 佐々木 俊 尚 委員 | 松 田 紀 子 委員 |

◇欠席委員（1 名）

秋 元 康 委員

◇社側出席者（8 名）

黒 坂 代表取締役社長
西 川 取締役副社長
小 川 常務取締役
内 藤 執行役員編成制作局長
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長
若 杉 編成制作局制作部長
増 田 編成制作局制作部プロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 25 分）
『住吉美紀の Blue Ocean』 5 月 25 日（月）9:00～11:00 放送

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■ 新しい生活様式で頑張るリスナーの “リ・スタート” を応援する
6月マンスリーキャンペーン「VOICE to VOICE ～明日へ」

TOKYO FM では、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言の解除を経て、出社再開、お店の営業再開、学校の再開・・・など、With コロナの中で、新しい生活様式で“リ・スタート”をするリスナーを応援する6月マンスリーキャンペーン、パーソナリティの声とリスナーの声、リスナー同士の声と声を繋ぐ「VOICE to VOICE～明日へ」を平日ワイド全番組で実施しました。

このキャンペーンでは、リモートワークや休業中に、自宅でラジオを聴いてくれた方が、出社再開・営業再開した勤務先のオフィスや店舗にラジオをプレゼントするデリバリー企画を実施し、合計で100台のラジオを贈りました。また、緊急事態宣言中、やむを得ず休業したり、なかなか積極的にお客さんをお呼び込めなかった飲食店等の営業再開を応援する企画「あなたのお店を“ラジオ PR”」と題して、お店の方と電話を繋ぎ、緊急事態宣言下で苦勞したエピソードを伺い、20秒の即興お店 PR をしていただきました。さらに、これから新しい歩み始める”リスナーからのメッセージ&リクエスト曲を募集し、番組で採用された方全員に、TOKYO FM の新ロゴステッカー&クリアファイルをプレゼントするなど1ヶ月にわたり、リスナーの新しいスタートを盛り上げました。



◀◀実際にラジオが届いた方からの SNS 投稿



■TOKYO FM 開局 50 周年アニバーサリーソング
SEKAI NO OWARI 「周波数」

2020 年 4 月に開局 50 周年を迎えた TOKYO FM では、これまでに開局 50 周年アニバーサリーソングとして、第 1 弾にスピッツの「ラジオデイズ」、第 2 弾にスチャダラパーとライムスターがコラボをした「Forever Young」をオンエアしてきました。そしてこの 6 月より SEKAI NO OWARI が制作した「周波数」を開局 50 周年アニバーサリーソングとしてオンエアしています。TOKYO FM と SEKAI NO OWARI は、2010 年 1 月、『SCHOOL OF LOCK!』にてデビュー前の楽曲「幻の命」を初オンエア、翌 2012 年 4 月からは『SCHOOL OF LOCK!』内でレギュラーコーナーがスタート。そして、この春からは、『SEKAI NO OWARI “The House”』が日曜 12 時～新番組としてスタートするなど深いつながりを持ってきました。この SEKAI NO OWARI によるアニバーサリーソング「周波数」は、「バンドを 10 年やっていくうちに感じた、“音楽に力はあるかもしれない”、という思いを歌詞にしました。」と語るメンバーの Saori が作詞作曲を担当しています。6 月 24 日（水）にリリースされた SEKAI NO OWARI のニューシングル『umbrella / Dropout』に収録され、現在 TOKYO FM でもパワープレイされています。



◀SEKAI NO OWARI

■特別番組『東京都知事選 2020 “with コロナ” の東京戦略』
7 月 5 日 20:00～21:00 放送

TOKYO FM では東京都知事選開票日 7 月 5 日（日）20 時から、報道特別番組として『TOKYO SLOW NEWS 特別番組 東京都知事選 2020 “with コロナ” の東京戦略』を放送いたしました。夜の報道ワイド番組『TOKYO SLOW

<第 470 回放送番組審議会>

NEWS』(毎週月～木曜 20:00～21:00)のパーソナリティをつとめる速水健朗と TOKYO FM 報道部アナウンサーの鈴木晶久が、ゲストに舛添要一・前東京都知事を迎え、現職の小池氏が開票直後に再選確実となった今回の選挙を振り返りつつ、「新しい生活」が求められる首都東京の現在の課題を整理し、これからの東京を考えました。



◀ (左) 速水健朗、(右) 舛添要一

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○この選挙特番から得たことは。ただの開票特番とはどう違うのか。

■今回の都知事選はあまり注目されていなかったこともあり、報道部を持つ局としてきちんと注目するべきところを確認し、伝えなくてはならないと、メディアの使命として放送した。ただの開票特番ではなく、これからの生活・これからの東京について、専門家の意見を伺いながら考察を行った。

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

『住吉美紀の Blue Ocean』

【放送日時】

5月25日（月）9:00～11:00 放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご視聴いただくのは、毎週月曜～金曜午前に放送中の生ワイド番組『住吉美紀の Blue Ocean』の、5月25日（日）放送回のダイジェストです。この番組は、2012年4月からフリーアナウンサーの住吉美紀がパーソナリティをつとめ、今年で9年目を迎えています。20代～40代の女性を中心に、今話題になっていることや、社会で問題になっていることをリスナーの視線（メール）を大切にしながら取り上げています。特に、リスナーの悩みにリスナーが答えるという企画「大人のなんでも相談室」が人気で、番組を介しリスナー同士がコミュニケーションするプラットフォームとしても機能。パーソナリティの住吉美紀もリスナーから大変親しまれている存在です。

今回の新型コロナウイルスについて、番組では2020年3月2日（月）から「新型コロナウイルス関連情報」特設コーナーを設け、注意喚起を発信してきました。4月15日（水）からは、番組出演者・スタッフの直接接点・感染リスクを減らすため、出演者・構成作家は自宅から出演・作業するリモート生放送へと形態を変更しました。しかしながらリモートへ移行直後の4月17日（金）に住吉美紀が高熱を出し、その後肺炎で緊急入院。PCR検査の結果、新型コロナウイルスの罹患が判明。スタッフにも数多くの自宅待機者が出る事態となり、放送は代打スタッフにより維持されました。住吉美紀の治療・療養期間は代演者が放送を続け、5週間に渡る治療・療養期間を経ての5月25日（月）に復帰放送となりました。

復帰後初の放送で、住吉美紀自身の今の素直な気持ちを伝え、さらにリスナーからの質問・疑問に真摯に答えています。この感染症が特異であること、そして、感染を受けての気持ちの変化。もちろん、罹患者それぞれで症状は様々であり、あくまで自身の経験談というスタンスでのトークではありますが、罹患者だから語れること、罹患者でないと知りえないことを、リスナーからの質問も受けながら分かりやすく伝えました。復帰放送当日に緊急事態宣言が解除されるという東京の朝に、これから with コロナの社会を生きていくことについてメッセージし、まだまだ新型コロナウイルスとの戦いは終わらないので、引き続き、各々が対策をせねばならないと、改めて注意喚起を行いました。同時に、新型コロナ罹患者が再び生放送に元気に出演し、日常の放送に戻ったという事実は、非常にポジティブで勇気の出る出来事。偏見に悩む人たちにも元気を届けることができた放送回になりました。

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○パーソナルな内容なのが良かったと思う。資料にも記載があるが、あくまで自身の経験談というスタンスが良かった。それがラジオの良さ。3.11 東日本大震災の時を思い出す。宮城・岩手・福島と首都圏、さらに西日本と全く状況が違った。被害の大きさなら、津波の被害があったエリアが甚大かつ深刻だった。では、浦安で液状化して家が被害に遭った人がそれほど大変ではないかといえばそんなことは全くない。あげられる声は全く違う。それなのに、どうしても他と比べてしまって「津波にさらわれた人に比べたらうちは大したことない。大変だとか申し訳なくて言えない」と言う。どうしても、ある時代の価値観や大きな物語でまとめようとしてしまう。今回のパンデミックも、「コロナとはなんだ」という大きなところから捉えたがる傾向がある。そうしないと視聴者・リスナーに伝わらないからと、全員をカバーしようとしてしまう。先の震災の例に戻すと、「復興が進んでいる」と言うのと、「いや、そんなに進んでいない」と怒る人がいる。逆に「復興が進んでいない」と言うのと「こんなに復興が進んでいるのに、なんでそんなネガティブなことを言うのか」と怒る人がいる。全員が満足する報道はない。今回のコロナ禍にも共通するところがあって、罹患した人全員が同じ症状ではない。ケースバイケースの小さな物語の集合体で成り立っている。思い切って大きな物語を伝えようとせず、パーソナルな小さな物語にした方がダイレクトにリスナーに伝わると思う。住吉美紀氏はラジオを通すととても近くにいる気がする。ラジオの効果というか、それはとてもいいことだと思う。Twitterの世界では、企業のアカウントは形式的すぎると全く響かないというのがある。フォロワー数が多く成功している企業アカウントは中の人の人間性が見えるアカウント。ごく当たり前かもしれないが、それが響くポイントになっている。住吉さんはラジオを通した時、より近くに感じる稀有なパーソナリティかと思う。そういう住吉さんのパーソナリティの良さと経験談が重なって、非常に秀逸な放送回となったと思う。

○この番組を聴くのは初めてだったが、いつもこんなに元気いっぱいなのか。それともこの日のテンションが特別高かったのか。また、いつもこのくらいたくさん話すのか。

■復帰回ということもあり、いつもよりテンションは高かった。

○ご自身の体験と、現場で起きていたことと、伝えたいことはたくさんあったと思うが、ラジオで、かつ午前中の番組であることを考えると、ラジオにはファンを大切にする側面と、一見さんも歓迎する側面があるとすれば、たまたまチャンネルを合わせた人には敷居の高い放送回だったように思う。もともとのリスナーにとっては「おかえり！」という共通の認識があったかもしれないし、そこに完成されたコミュニティを楽しませることには

成功していたかもしれないが、ずっとトーンが高いまま話し続けていたので、初めて聴く人は少し疲れてしまうかもしれない。とはいえ、SNS で世界の状況は随時誰でもアクセスできて、この放送時、「このままでは東京はニューヨークになる」と言われていた頃だったと記憶しているが、その中で個人的な体験談を話すことは身近な注意喚起につながると思う。ただ、これは公共の電波、ラジオであり、ファンミーティングではないので、高まる場所を少し抑えるべきだったのではと思う。自分のことを知らない人もいるだろうという冷静さは必要。

〇つらい体験を明るく言う、というのは大切なことかもしれないが、テンションの高さで伝わりにくくなってしまっていたと思う。またテンションだけではなく、使っている語彙もそうで、感謝やありがとう、感動した、という言葉が却って安っぽく感じてしまう。

〇午前中に聴くには少し疲れるテンションだった。恐らく、それがコロナの回復からの復帰の喜び、乗り越えたということなのだろうとは思いますが。嬉しさは理解するが、ある程度の年齢になったら、明るくて元気なのとやかましいということは別物だと分かるべきなのかと思う。途中から聴いた人はついてこられなかったかもしれない。トークに生身の人間も出ていて、経験者しか語りえないことを話してくれたのは良かったが、せっかくの経験談が、テンションの高さで伝わらないのはもったいない。住吉美紀氏はアナウンス力も高く、実力のある方。リスナーが「本当に元気をもらった」というメッセージをたくさんよせていて、元気づけられたリスナーが多いことも理解するので、メリハリをつけるなどもう少し工夫して欲しいと感じた。

〇この番組は時々聴いている。確かに今回の放送はテンションが高かったとは思いますが、普段の放送ではもう少し落ち着いていると思うし、合間合間に曲がかかるので、聴いていて疲れるということはありません。新型コロナウイルスに罹患した経験談を語るのは、現在のこの社会情勢の中で、多くのリスナーにとって大変貴重な機会になったと思う。医療関係者への感謝の言葉は世間のいろいろなところに溢れているが、実際に罹患した住吉美紀氏の言葉で、実際のやり取りの内容、医療関係者への感謝や敬意を話しているのはとても胸に沁みだ。当事者じゃないと伝えられないことを語っていると感じたし、頼もしさも感じた。この放送の数日後の放送でも、医療関係者とのその後のやり取りなども紹介していた。実際の経験者の口から語られることには価値がある。まだまだ続くこのコロナ禍において、きちんと啓発して欲しいと思う。

〇感想を述べるのは難しいと感じた。まずは、戻ってきてくれてよかった。いくら消毒して気を付けても罹る時は罹る、治るのに時間がかかる、体力だけでなく気力が必要だったことなど、経験した人にしか分からないこともたくさんあった。ただ、闘病経験を一人称で語るのは難しいのではないかと思う。のっけから全速力のトーンで語るのは、元気に戻

ったという証拠ではあるのだが、闘病中に代打をつとめていた人たちとのトーンの差もあった。もしかしたら、自分の闘病体験をひとりで語るのは難しいかなと感じた。例えば、この期間代打をつとめてくれた人を聴き手として立てるなど工夫ができたのではないか。リスナーに向けてではなく、その聴き手に向かって話せばトーンも抑えられたように感じる。元気になってよかったのだが、番組として聴いた時に違和感を覚えてしまったのが残念。

■復帰回でテンションが高かったのと、2 時間の番組をダイジェストに編集する中で、本人のコメントのテンションの高い部分が抽出されていたようにも思う。しかし、自分はコロナから復帰したサバイバーだ、というある種のハイ状態があったことも事実。この放送回は復帰の第 1 日目で、ご自宅からの放送だった。スタジオに戻ってからはもっと俯瞰して経験談と社会のことについて話せていると思う。初めて聴いた人は驚いてしまうというご指摘はごもっともで真摯に受け止めたい。

■事前のプレゼンや編集の問題もあったかもしれない。復帰回という特別な回だったので、予め普段の住吉美紀氏のキャラクターの説明が必要だったかもしれない。語彙という指摘もあったが、とてもインタビューのうまい方。どんな世界の人に来て、基礎的な知識の幅が広く対応ができる、知識豊かな方だと認識している。2 時間全て聴くと、ハイテンションだけではないと思ったが、もう少しディレクションの工夫はできたのかと思う。

○構成の順序をもっと事前に工夫したほうが良かったかもしれない。罹患し休演していた間、そして復帰に際し、リスナーからたくさん励ましや、おかえりのメールをもらって、「自分が大切に思われていること」に気付いた、コロナに罹ってもいいことがあったとまず初めに紹介されていたので、そういうことは言わないか、言ったとしても最後に言わないと、のっけからそのテンションだと聴く人の中には「痛い」と感じてしまう人がいるかもしれない。

○公共性がどこまで必要か、といえば、個人的にはラジオというメディアの特性はパーソナルなところにあり、それが魅力だと思っている。音楽の世界もそうだが、ヒット曲をかけて人気を博すことと、コアな音楽をかけることは違う。アーティストはその個人的なストーリーを紡いでいて、ラジオはそれに近いのではと思っている。そういう意味でやっぱり自分は今回の放送回はとても良かったのではないかと感じた。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「Ready Saturday Go」

7月 25 日 (土) 6:00～6:40 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>